

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼の散育

主 幹

堀 七 藏

第二十五卷 十二月 第九號

- | | |
|-------------------|------------|
| 幼兒教育の根本原理(二)…………… | 靜 枝 譯 |
| 長編 兼ちやん…………… | 岡 田 美 津 |
| 育 兒 叢 談(六)…………… | 記 者 |
| 大阪市露天保育…………… | 松 川 ヨ ノ |
| 幼稚園のお母様はかやうに…………… | 水 島 さ ゆ り |
| 喜びの保育…………… | 中 村 楠 雄 |
| 幼兒にきかせるおはなし…………… | 政 衛 |
| きびがら細工(其二)…………… | 山 形 寬 |
| 心理學の新傾向…………… | 文學博士 松本亦太郎 |
| 幼兒の食物…………… | 堀 七 藏 |

たいつの作動

歌唱いしさを

錢八拾料送・圓貳價定

本書は改版に際して四冊に分れてゐたものを一冊に収録しました。その方が使用者諸士の非常なる便宜であると思つたからであります。編輯にも極力意を用ひて従來の方針を根柢から改め、曲譜・略譜・歌詞・振付などもまちまちであつたものを統一してわかり易く一ヶ所に集めました。それで大變使用上便利にもなりましたし、全く一變した立派なものになりました。心から児童を愛し児童に魂の糧を與へやうと御考へになつてゐるあらゆる小學校、幼稚園、家庭に本書は備へられなければなりません。

一九二五 十一月

厚生閣編輯部

詩 作

傳田次郎氏	黒田みのる氏	法月歌客氏	千村春雄氏	中葉紅氏	福山天陰氏	北藤白秋氏	加藤まさを氏	山藤カズミ氏	村山カズミ氏	眞田英貞氏	好田範衛氏
-------	--------	-------	-------	------	-------	-------	--------	--------	--------	-------	-------

詩 曲

佐々木すぐる氏	梁田貞氏	草川信氏	水野康孝氏	杉山はせを氏	松島舜氏	林松木氏	大和田愛羅氏	室崎琴月氏	眞島陸美氏	水谷しさを氏	印牧すゑを氏	平岡やちよ氏
---------	------	------	-------	--------	------	------	--------	-------	-------	--------	--------	--------

「動作のついたやさしい唱歌」御家庭と云はず校庭と云はず狭い教室と云はず廣々とした野原の真中と云はず恐らく子供が三々五々集ひ得る所であれば容易に實演出來るのです。

版 四

體育教材
としての

學校舞踏二十四講

小瀬峰 洋著

定價 十二圓
送料 十八錢

發 兌 東 京 芝 區 八 橋 町 五 九 番 五 五 號 厚 生 閣 關

一、**御入會**を希望いたします。

日本幼稚園協會に御入會下さい。毎月機關雜誌幼兒の教育を配布いたします。またいろいろの便宜があります。

二、**御寄稿**を歓迎いたします。

幼稚園や托兒所の狀況なり、幼兒に關する研究調査なり、また童謠・童話なり、苟も幼兒の教育に關する事項についての御寄稿を歓迎いたします。

三、**會費**は前納に願ひます。

半ケ年分金貳圓拾錢、一ケ年分金四圓貳拾錢であります。

振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に御拂込み下さい。



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

贊助員

東京高師教授

巖谷秀雄

東洋大學教授

高島平三郎

東京帝大醫科講師

乙竹岩造

東京府女子師範學校長

龍山義亮

東京高師教授

太田孝之

帝國教育會理事

土川五郎

慶應大學教授

唐澤光德

松江高等學校長

野口援太郎

東洋幼稚園長

岸邊福雄

京都帝大教授

乘杉嘉壽

早蕨幼稚園長

久留島武彦

東京女子高師教授

倉橋惣三

帝國教育會會長

澤柳政太郎

東京女子高師教授

弘田俊夫

東京高師教授

佐々木秀一

東京帝大教授

松村武雄

東京女子高師教授

下田次郎

東京帝大教授

松本亦太郎

東京女子高師教授

菅原教造

奈良女子高師校長

榎山榮次

醫、文博

富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

三田谷啓

東京市學務課長

藤井利譽

東京高等學校長

湯原元一

東京女子高師講師

藤五代策

東京帝大教授

吉田熊次

長崎縣師範學校長

福士末之助

日本女子大學

安井哲子

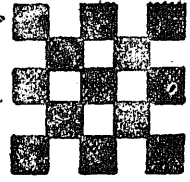
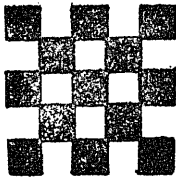
文博

谷本富

日本女子大學

安井哲子





第九號 幼 兒 教 育 の 第 二 十 五 卷

—(次 目)—

幼兒の食物……………	堀 七 藏……………	二頁
心理學の新傾向……………	文學博士 松本亦太郎……………	二頁
きびがら細工(其二)……………	山 形 寛……………	一五頁
幼兒にきかせるおはなし……………	政 衛……………	〇頁
喜びの保育……………	中村楠雄……………	三頁
幼稚園のお母様はかやうに……………	水島さゆり……………	二七頁
大阪市露天保育……………	松 川 ヨ ネ……………	四三頁
育 兒 叢 談 (六)……………	記 者……………	三三頁
長編小説 兼ちゃん……………	岡 田 美 津……………	五五頁
幼兒教育の根本原理(二)……………	辭 枝 譯……………	五二頁



少年少女常識叢書

東京高等師範學校 府立師範學校 女學校 教官分擔責任執筆

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-----|-------|------|------|-----|------|------|------|------|------|-----|-------|-------|------|-------|-------|-----|-------|-------|------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 15 | 東京小松崎 | 14 | 東京小松崎 | 13 | 元早 | 12 | 東京岡崎 | 11 | 東京岡崎 | 10 | 東京岡崎 | 9 | 元早 | 8 | 東京中澤 | 7 | 東京中澤 | 6 | 元早 | 5 | 東京白井 | 4 | 東京白井 | 3 | 元早 | 2 | 東京小松崎 | 1 | 元早 |
| 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京岡崎 | 東京岡崎 | 東京岡崎 | 元早 | 東京中澤 | 東京中澤 | 元早 | 東京白井 | 東京白井 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 | 元早 | 東京小松崎 | 東京小松崎 |
| 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | 三枝著 | |
| 海 | 空 | 無線電 | 南 | 昆 | 人 | 瓦 | 發 | 興 | 星 | 動 | 火 | 蒸 | 植 | 地 | 震 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | |
| 中 | 中 | 線 | 半 | 虫 | の | 斯 | 明 | 味 | の | 物 | と | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | 物 | 汽 | |
| 旅 | 動 | 電 | 球 | の | 行 | の | 家 | の | 世 | 生 | 空 | 偉 | 世 | 知 | 識 | 界 | 活 | 氣 | 力 | 界 | 識 | 界 | 識 | 界 | 識 | 界 | 識 | 界 | |
| 行 | 園 | 信 | 巡 | 世 | く | 魔 | 見 | 術 | 界 | 活 | 氣 | 力 | 界 | 識 | 界 | 活 | 氣 | 力 | 界 | 識 | 界 | 活 | 氣 | 力 | 界 | 識 | 界 | 活 | |
| 園 | 園 | 話 | り | 界 | 道 | 力 | 家 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 30 | 東京田邊 | 29 | 東京田邊 | 28 | 東京田邊 | 27 | 東京田邊 | 26 | 東京田邊 | 25 | 東京田邊 | 24 | 東京田邊 | 23 | 東京田邊 | 22 | 東京田邊 | 21 | 東京田邊 | 20 | 東京田邊 | 19 | 東京田邊 | 18 | 東京田邊 | 17 | 東京田邊 | 16 | 東京田邊 |
| 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 | 東京田邊 |
| 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 | 八著 |
| 心 | 鎌 | 我 | 現 | 地 | 寫 | 理 | 飛 | 北 | 偉 | 世 | 鐵 | 國 | 格 | 算 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 |
| の | 倉 | 等 | 代 | 下 | 生 | 化 | 行 | 半 | 人 | 界 | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の | の |
| 算 | 物 | 身 | 識 | 辭 | 體 | 典 | 驗 | 話 | 涯 | 候 | 油 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 | 識 |
| 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 | 術 |

文部省 認定

東京高師茗溪會推獎 各都市教育會賞讚

東京市牛込區西五軒町四十一番地 發行所 文洋社 電話東京一五〇九四番

後前頁十八百十數畫插裝美判六四 卷十三全 錢六料送 圓壹金各價定 呈進本見容內



號九第 育教の兒幼 卷五十二第

月二十年四十四正大

- 一、教育で家庭教育位重要なものはありません。家庭教育の良否は實に人一生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。
- 一、家庭教育の短を補ひ幼兒の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園教育であります。幼稚園教育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。
- 一、幼兒の教育は本邦唯一の幼稚園教育に關する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。
- 一、幼兒の教育は幼兒の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園教育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

幼 兒 の 食 物

堀 七 藏

二

一

幼兒の食物について先づ考へられることは食物の種類であります。子供の胃腸は大人の消化器に比べてお話にならぬ位薄弱なものでありますから勿論消化し易き食物であらねばなりません。不消化な食物を與へても單に胃腸を損するのみで何の効果もないことは明白であります。幼兒の食物を幼稚園のお辨當などで見ますと、どうしてこんな不消化な食物をお與へになるかと怪まれることがあります。これは一はお辨當の食品は汁の出ないものといふ條件がありますために兎角干物が多く使用せられるといふ結果になるからであります。また一には子供のお辨當を別にこしらへるとの不便が伴ふことがあるからであります。お辨當ばかりでなく毎日朝夕の食物も大人本位であるため子供相當な香辛料の多い食物とか不消化な食物があてがはれることがあります。それにお辨當のことは一切女中に任せて顧られない爲にどんなものをどんな分量に與へられてゐるか、一切分らないといふ場合もあるやうであります。實は極

端な例でありますが、曾つてこんな事實があつたこともあります。ある富豪の幼児であります。毎日のお辨當を見ると干魚一つ位づゝしかお菜として入つてゐないのであります。幼児の食物としては甚だ不相當なものであります。御飯と澤庵で十分發育盛りの幼児の營養分がとれる譯もなし、また干魚の一や二で子供がよく御飯を頂くことが出来る筈がありません。保母は餘り不思議でありますから特に附添の女中に尋ねて見たのであります。「お子さんのお辨當はお母様が御覽になりますか」と尋ねて見ますと女中は平氣な顔で申しました。「奥様はお嬢様の幼稚園へいらつしやる頃はまだお休になつてゐますから一度も御覽になつたことはありません」。成程服装は相當以上であるが食物は不相當どころではない、實に可愛想な貧弱なものばかりと納得が出来ました。それで「モットお子さんの食べられるやうなものをお辨當に與へて貰ひたい」と注意を與へました。するとその後二三日は相當な食物がお辨當に入つて居りました。卵焼のやうなものが入つて居りましたが、奇妙なことにその幼児は食べないで持つて歸るのであります。「何故食べないの、おきらひですか」と尋ねて見ますと更に驚くではありませんか。「これはねいやに持つて行くの」といふ幼児の返事であります。おしいものを女中に提供して女中の歡心を買はんとする幼児の心事實に悲しむべきものであります。お辨當に幼児の食物に適當なるものを入れねばならぬとの命令に入ればするものゝ、母親の監督不十分のために女中に與へる契約が内密にしかも幼児との間に行はれてゐる奇怪さ。そんな馬鹿なことがあるものかと驚かれるならば幼児は幸福であります。何とかして

幼児の食物は幼児に適當した消化し易いものでありたいと思ひます。また發育盛りの幼児の食物でありますから相當滋養に富んだものを與へて頂きたいと思ひます。これは單にお辨當に限つたことではありません。三度の食事は勿論お三時とか時々與へられる間食に於ても十分の考慮を拂つて頂きたいと、幼児に代つて母親は勿論幼児養育に關係せられる人々に希望したいものであります。

二

幼児の食物は滋養分に富み消化し易く又相當の分量でなければならぬとは育児法に述べてある條件其儘適用して頂くことは申分がないやうであります。しかし文句は文句で、實際は中々それに當てはまらぬ場合が多いのに驚きます。どんなに滋養分に富んだ食物でもその子供が好まぬものを強ひたのでは面白くありません。御承知のごとく子供位食物に好惡の多いものはないのであります。その好まぬものを強ひて與へますと消化不良を起したり食物中毒を起すことさへありますから注意を要するのであります。元來食物の好惡は幼児の身體の必要から起るものであります。一般に水分の多き食物を幼児が好むのは水々しい幼児の身體上の必然の要求であります。それで食物を與へる親切があつても水を與へる親切が無とはれる位であります。乳汁を與へられてゐたものが直に普通食に移るとが出来ないのは當然であります。カステラが消化がよいかウエファースが消化し易いかいつても水分が少いから幼児は

好みません。ビスケットに至れば尙更でありませう。こんな水分の少いものを與へんとするならば必ず乳汁なりまた水なりを共に與へる用意が必要です。こんなことを考へると幼児は自然に本能的に必要な成分を含んだものを好むのは一般通則であります。好むものを與へることは大人でも食欲が盛で消化がよいのでありますから是非幼児の食物としては幼児の好むものでなくてはならぬと思はれます。分柝上如何に滋食に富んでゐても幼児の好まぬものは與へないやうにしたいと考へます。

ところが幼児に食物の好惡をいはせてはならぬと家事などの書物にはよく書いてあります。子供が何でも與へられたものを文句をいはず食することは大人の方面からいへば都合のよいことに相違ありません。しかし眞實子供がきらひであれば子供の身體がそれを要求しないのでありますから、親の方で都合が悪くとも子供の申分も大きく必要がありません。大抵の香辛料などは幼児は好みません。それを大人が面倒であるとか大人の眞似とかで次第に食するやうになるので幼児の身體發育からいつたならば禁物でありませう。尤も幼児のことだから所謂食はすぎらひが多いことは勿論であります。成るべくいろいろのものを食はせるやうに自然に仕向ける方がよいのであります。これは本能のことではありませんから次第に訓練せねばなりません。

いろいろの食物を混食することは他の動物に稀なことであり、人間が飼養してゐる動物は人間の與へるものを次第に食するやうになつてゐますが、自然に生活してゐる動物は彼等の得易い食物を食するのが普通であります。紋白蝶は主として菜の葉で育ちます。あげはの蝶はからたちの葉を好んで食するのであります。蠶は桑の葉、すゝめは穀物、燕は蟲、とんぼは蚊か蛾の如きもの、また鯨は鱈の如きも、香魚は硅藻といふやうな工合にそれ／＼單純な食物をつゞけて食するものであります。牛馬は主として植物性食物、獅子・虎・鷹・鷲は動物性食物を主食とするのであります。鼠と人間とは何でも食し所謂混食をするのであります。がそれでも單一な食物を續けて食する傾向を持つて居りませう。子供の食事するのを見てゐると一口毎にませて食することは稀で、一つものを續けてたべるものであります。また料理でも日本料理は比較的單純であり支那料理は非常に複雑してゐますから一般に子供は日本料理を好むものであります。尤も習ひ性となるものでありますから好きなもののみを食せしめず時々新奇なものを味はせて食物の好悪が自然になくなるやうに食はずぎらひをなくする工夫が必要であります。只きらひだといふものを無理にも食はせうとしたり、きらひだといつても無理に與へて他を、與へないといふ極端な取扱は禁物であります。若し著しく食物に好悪があるならばそこに相當な理由がありますからその原因を調べる必要があります。身體に異状があるために食物に好悪がある場合が少くありませんから著しく食物に好悪のある場合には醫師の診察を受ける必要があります。曾つて一幼兒が六七歳になつてゐて

も成るだけ流動食を好み固形物をさけて食はない有様であつた。どうして固いものを食はないのか不思議な位であります。固いものは不消化ときめてゐる親は固い物を食はぬのがよい幸と考へた位でありますからその儘に打捨て置いたのであります。それにしても子供は十分な發育をせず不思議に思ひながら成るべく卵とか牛乳とかを與へて居たのであります。所が發熱のことから扁桃腺が著しく肥大してゐることが分り或る醫師によつて扁桃腺を切除したのであります。それからは件の幼兒は固形物を好んで食するやうになり手術前とは打つて變つた有様になつたのであります。これは扁桃腺が肥大するため不知不識の中に幼兒は固形物をとらなくなつたもので、そのため身體の營養が著しく悪くなつた例であります。三四歳から五六歳の幼兒には扁桃腺肥大やアデノイドのものが多くそのため食物に好惡を來す、寧ろ好むものをも食することが出來なくなる場合が多いのでありますから、「何せ食はないのです」などと叱責することをさけて相當に幼兒の身體を檢查する必要があります。世には兎角幼兒の衣服に善美を盡すものが多いけれども幼兒に必要な食物に深き注意を拂ひ、幼兒の自然の欲求に耳を傾くるが如き態度が少いことを遺憾に思ふのであります。單に大人の都合や必要のみから打算して幼兒の生命を左右し發育を阻害するが如き食物を平氣で與へてゐるなどは以ての外といはねばなりません。

心理學の新傾向

八

文學博士 松本亦太郎

本篇は大正十四年十一月廿日の東京日日新聞學術欄上に掲載せられたものであります。心理學の大家松本博士のお話でありますから吾々保育關係者の參考となりますから特に全文を轉載することにいたします。

現在の心理學の傾向を見ると、その研究に二つの方向がある。即ちその一つは心的作用を分解して簡單なるものに分類し、その單元になるものを見出して、それがどういふ具合に結び付いて複雑なるものが出来るかといふ、分解的でしかも構成的な研究法である。従來の精神物理學、或は實驗心理學、または少し以前に英國で研究せられた聯想心理學などは矢張りこの傾向に屬する。

今一つの傾向は、心的現象を分解的に見ないで、全體としての心は如何に進展して行くかといふ立場からの研究である。詰まり心的現象を全體状態と見、夫れを基礎として、心の機能の方を研究して行く方法である。この方では自然に考へ方が動力的になつて、働いて行くといふ形でもつて心の働きを見て行くのであるが、大體の傾向をいふと、総合的に心的状態を崩さないで研究して行かうといふ方法である。

□
即ち心理學の研究は、分解的構成的心理學と、全體的機能的心理學との二つに分れ、それが互に對抗し、或は競つて來たのである。

今これを人について見ると、全體的機能的心理學の見方をする者は、フランスの心理學者には少くない、リボー、ビネー、或はベルグソンなどはさういふ傾向に屬する。米國において、ジエームスなどは機能的心理學の立場に立つてゐる。同じ學統を引いてゐるエンジエルの如きも機能的心理學を唱道した。又埃國のグラッツ學派に屬する心理學者は、心的現象を全體として考へんとしてゐる。

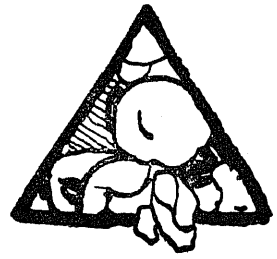
最近ドイツの心理學者で全體的心理學の方向において新機軸を出しはじめたのは、ベルリン大學にゐるウエルトハイマー及びケーラー、なほ一人はギーセン大學にゐるコフカの三人であつて、これ等の人々が形態心理學を説きはじめたのである。形態説とは、心が働く時に、一つの全體としての形になつて働いてゐる、心の働きは形態の系列である、といふのである。形態心理學では、心の働きを動力的に見て、その見地から心の働く法則を探索しやうとする。心を形態的に見ることはグラッツ學派ですでに考へてゐたが、ドイツの方で夫れを新に考へ直しつゝあるのである。而して形態論者は、從來の構成的分解的の心理學に代ふるに形態的綜合的の心理學を以てしやうとの氣概をさへ示してゐる。

□

兎に角かういふ二つの流れがあつて、學者が互に是非を争つてゐるが、併し大體心理學の發展といふ
廣い立場から見ると、この二つの方向の研究はいづれもその發達に貢獻してゐる。

この二つの研究方面が實生活に結び付いて夫々の効果を擧げつゝある。能率心理學とか、人間工學と
か、實業心理學とかいふ様な學問は米國にその起源を發して、その流れは更にヨーロッパに渡つた。實
際生活に心理學上の研究を結び付けて、人間の活動を整理して行かうと努力しつゝある。

例へば工場内の仕事とか、交通機關の運轉とか、實務上の仕事とかいふやうな實生活における種々な
方面の働きを科學的の根據に従つて整理してその効果を増進せしめんとするのである。或は職業を分解
的に研究し、又人々の智能技能を個々の要素に分解して検査しその人が其仕事に適するか否かを考へて
仕事を處理して行かうとしたり、能率を増進するやうに作業法を改良したりする。斯る方面の工夫や仕
事は心理學の分解的、構成的の研究が基礎になつて出て來た。人間を力と見てその力の作業能率を増進
させやうとする方面は分解的、構成的の研究が基礎になつてゐる。



きびがら細工 (其二)

東京女子高等師範學校訓導 山 形 寛

四、きびがらを棒状のまま、

用ふる教材

きびがらを棒状のまま用ひて構成する諸種の教材は、幹を短く切つて豆の代用として構成するものよりも、構成が一層容易になり、且つきびがら細工本来の長所をよりよく發揮することになる。然し全部棒状のまま用ひたのでは、あまり多くの材料を要するから、物によつては籾竹又は皮と並用することもよい。又さうした方がより有意味な、より合理的な構成となるものも少くない。

斯かる構成法による教材は、豆細工では出来ない特殊なものもあるし、又豆細工でも出来るけれども、きびがらを用ひた方がより面白く出来るものである。以下少しくこれ等の實例に就て説明しやう。

一、汐干狩の熊手

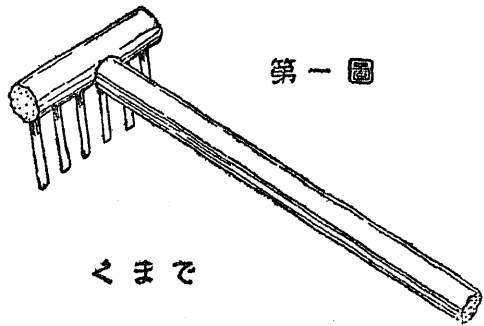
單に熊手としてもよいが、汐干狩の熊手と云つた方が面白い。その工作法は次の如くする。

(1) あまり太くないきびがら(皮をとつたもの以下特に注意したもの)の外は單にきびがらと云へ

揃へて仕上げる。

二、筥

第一圖



くまで

ば皮をとつたものと解されたい)を長さ約四センチ位に切つたものと、その三倍位の長さに切つたものとを作る。

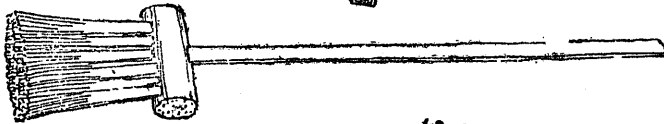
- (2) この二本のきびがらを第一圖に示す如く、皮又は籾竹で丁字形に接合する。
- (3) 籾竹又は皮を細く

く割いだものを長さ約三センチ位に切つたもの六七本を作る。

(4) 第三工程で作つた籾竹又は皮を、丁字形に接合したきびがらの短い方の材料に、第一圖に示す如く、少しく内向きに、且つ等距離に刺す。

(5) 刺した籾竹又は皮の先端を缺で切つて端を

第二圖



はうき

(1) 少し太目のきびがらを長さ二センチ強に切る。

(2) きびがらの皮の幅の広いものを長さ約四センチに切つたもの數本を作り、各の小区を、皮の纖維の方向に、細かく缺できざんでさゝらの如くする。

(3) 第二工程で作つた材料の細割しない方を、第一工程で作つたきびがらに、なるべく多數刺し、先端の不揃の所を缺で切つて揃へる。

(4) 少しく幅の広いきびがらの皮を、長さ十二

三センチに切つたものを第二圖に示す如く刺して仕上げる。

この工作は形は簡単な様でも接合は割合に六ヶ敷いが幼児にでも出来ないことはない。

三、柄附ブラツシ

掃除の際用ふる柄附ブラツシは、熊手の丁字形の柄の先へ、箒の先端の如きさゝら状のものをつければ出来る。

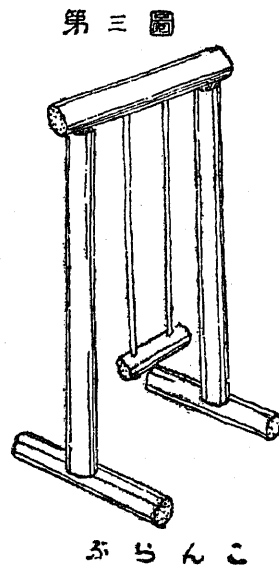
四、ぶらんこ

(1) 中位の太さのきびがらで、全長のまゝのもの(約十八センチのもの)二本と、約九センチのもの一本と、約八センチのもの二本と、細いきびがらで長さ約四センチのもの一本とを作る。

長さ約九センチのきびがらの両端に近く、接合するための籤竹又は皮を(長さ約三センチの

もの)直角に刺し、全長のまゝのまゝのきびがらを此所に接合する。

(3) 籤 又は細く割つた皮を、長さ約四センチに切つたきびがらの両端に近く、直角に接合し、他端を第二工程で作つたものゝ、長さ九センチの棒の中央に第三圖に示す如く接合する。これでぶ



らんこの形は大體出来たのである。

(4) 第三工程で作つたぶらんこを立てるために、長さ約八センチのきびがらの中央に、接合するための籤竹又は皮を直角に刺し、然る後ぶらんこの

柱の端を刺して圖の如くする。

此のぶらんこを作るに、兒童等に任意にやらせると柱其他に短い材料を用ひて、ぶらんこらしい感じのしないものを作ることがあるが、それでは形の觀念を養ふ上に拙いから、材料は多くかゝつても、圖に示す位の割合に作らせるがよい。

ぶらんこの乗る處を吊してある紐は、此の説明では籐竹又は皮で作る様になつて居るけれども、糸で作らせれば最もよい。

圖に示したやうな形に作つただけでは、柱の下部の開きが固定しないと思つたならば、立てるための臺（長さ八センチの材料）と臺との間に、皮の稍々幅の広いものを入れるがよい。

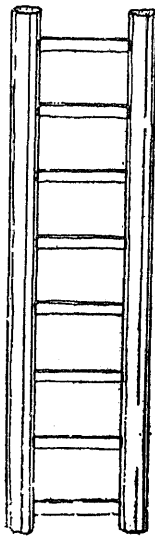
五、は し こ

中位の太さのきびがらの全長のまゝのもの二本と、少しく幅の広い皮を長さ約六センチに切つた

もの數本とで作る。その接合法は、先づ一本のきびがらに、皮を等距離に直角に刺し、然る後他のきびがらを當てて端から順に接合するのがある。

この梯子を作る時に最も注意すべきことは、一本のきびがらに數本の皮を直角に等距離に刺すことである。直角に刺す作業は豆細工に於ける場合も同様な困難があるのであるが、等距離に刺すことは、豆細工の場合には籐竹を直してから、豆を動か

第四圖



は し こ

して修正することが出来るけれども、きびがら細工の時はそれが出来ないから、最初に刺す時に注意しなければならぬ。視覚と筋肉運動とを關係的に陶冶することはかゝる作業に於て忘る可らざることである。

六、寢 臺

第五圖及び第六圖は寢臺の工作順序と出来上りとを示したものである。之を製作するには次の如

くする。

(1) 先づ左記の諸材料を作る。中位の太さのき

びがらを長さ約十二センチに切つたもの二本(第

五圖A)同じ長さ約七センチに切つたもの二本(第

五圖B) 同じ長さ約四センチに

切つたもの三本(第五圖C) 同じ

長さ約三センチに切つたもの二本

(第五圖D)と、きびがらの皮をや

ゝ幅廣くはいだものを長さ約十三

センチに切つたもの五六本(第五

圖E) 同じ長さ約五センチに切つ

たもの二本(第五圖F)ときびが

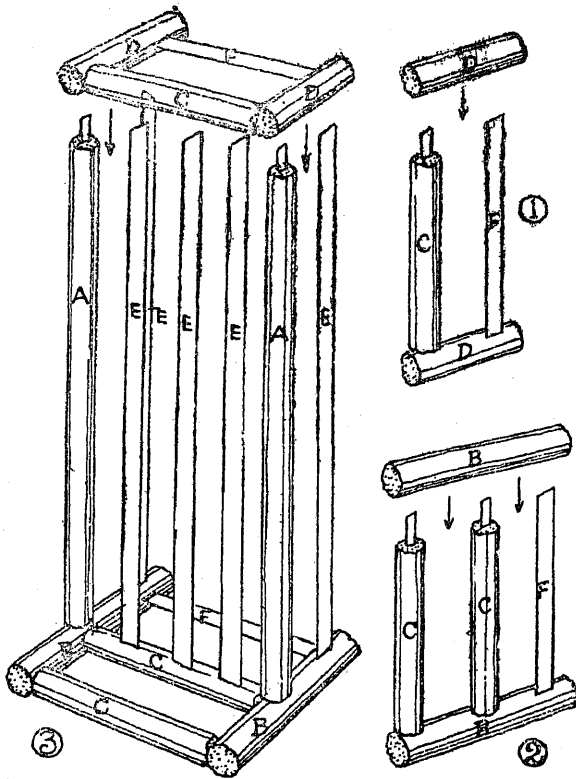
らの皮を細く切つたものを長さ約

三センチに切つた接合用の材料數

本とを作る。

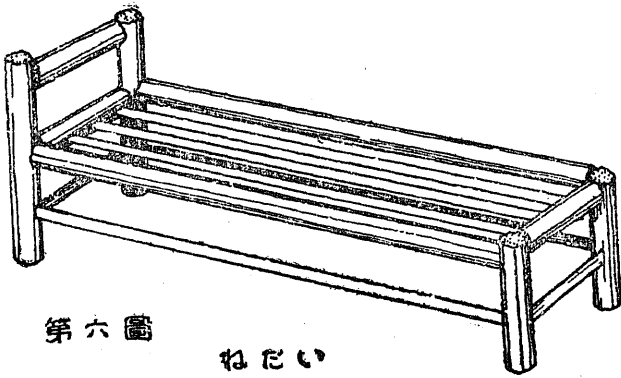
(2) B材料(長さ約七センチの

もの)の一端と中央とに、C材料



第五圖 ねたいの工作法

(長さ約四センチのもの)を直角に接合し、更にB材料の他端に近くE材料を直角に接合する。(第五圖2参照)



第六圖

ねだい

(3) 第二工程で作つたもの以外のB材料を第五圖2に示す如く接合する。

(4) 第二第三工程に準じて二本のD材料とEの兩材料とを第五圖1に示す如く接合する。

この時第三工程で作つたもの、(第五圖2)の下

半分の形と同じ形になる様にする。

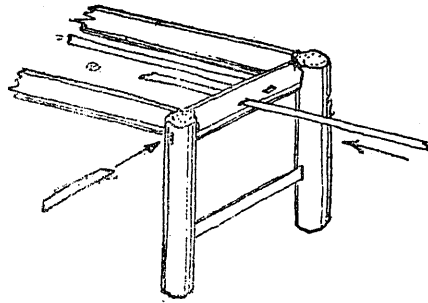
(5) 第三工程で作つたものに、二本のA材料(長さ十二センチのもの)と、五本のE材料(長さ約十三センチに切つた皮)とを第五圖3に示すが如く、直角に接合する。この時E材料は總て幅の廣い方向をきびがらの纖維の方向と一致させて接合するの必要がある。

(7) 前工程で作つたものは第四工程で作つたものを、第五圖3に示す如く接合する。

(7) 全體の歪を修正して仕上げる。第六圖は仕上りの形を示したものである。

この工作に於て、寢臺の上面をなす部分には、この圖では三本の皮を用ひて居るけれども、これは四本乃至五本にしてもよい。然しあまりに接近して數多くつける時はかへつて接合部が弱くなる恐れがある。

第一工程で述べた材料さへ作れば、何處から作



第七圖 ぜびがら接合略法

つても作れるには作れるけれども、茲に述べた方法が、工作も容易であり且つ合理的な方法である。

然し幼児児童に作

らせるとしては、

先づ四本の脚と主

なる横棧を作らせ

て、然る後に寢臺

の上面の寝る所に

當る皮を併べて作

つた部分其他を作

らせてもよい。斯

くの如き方法は結

果はよくないけれども子供等の心理が斯様に動く場合には無理に合理的な方法に依らしめるの要もない。

ない。

接合部の工作を第七圖に示す如く外部から接合

用の皮を切つたもの或は皮をそのまま材料として

用ふるものを刺して作る方法をとれば、可なりの

變則的な方法によつても大した無理なく出来る。

この場合には若し外側に餘つた部分が突き出て居

る様な時は缺でその部分だけを切りとればよい。

この方法は幼児児童にはやりよい方法である。然

し結果は幾分きたなくなることがある。

幼児にきかせるおはなし

政

衛

十月十一月は運動遠足の季節、十二月は爐邊あたたかに談笑の家庭味豊に……つまらぬ小話も子供にきかせて、少しでもそれによつて軽い温い感しが起ればうれしい。

一、小さい兵隊

或るところに兵隊のすきな坊ちゃんがありました。
た。

「僕兵隊さんになりたいな」

と口ぐせの棲にいひながら、毎日お友達と兵隊ごっこをして居りました。その子供の名は、武夫といひました。

武夫があんまり兵隊さんが好きでしたから、お祖父さんが赤い帽子を、お祖母さんが「ランドセル」を、お父さんが鐵砲を、お母さんが「サーベル」を買つて下さいました。うれしくつて毎日毎日お友達のお敏夫さんと一しよに兵隊ごっこをして遊びました。

「テーテー タツタター タツタ タツタ タ
ーア」

「前へ……進め 一二 一二 一二」

「かけあし オイ」
と元氣よくあそびます。或時どこからか「ラツバ」の音がきこえて参りました。

「やあ！ 「ラツバ」の音！ 兵隊さんだ」

と耳をすまして居た武夫さん、勢よくお家をかけ出しました。まもなく大勢の兵隊さんが、「ズラリ」とならんで通ります。武夫はうれしくつてくたまらない、夢中になつて見て居ると、其時どこかの小さい子供が「ヨチ／＼」と走つて来て、ころびました。「ワア……」といふ泣聲、武夫は「ちらつ」とこれを見て、びつくりしてかけ出し、その子供を抱きおこしてやりました。すると丁度其時そばを通りかゝつた將校が、

「やあ……小さい兵隊、感心々々」

といつてほめました。即座に武夫は

「小父さん、小父さん、僕兵隊さんになれるでせうか」ときこえました。將校はにつこりして

「君は立派な兵隊さんよ、弱いものを助けるのは、僕たちよりも多らい兵隊さんだ。」
とほめました。

一、おしやべりな人

或ところに大層おしやべりな威張屋がありました。何でもしらぬ事はないといふて朝から晩までしやべりつゞけて自慢して居りました。

或時一人の惻かな人がこの人に向つて、

「あなたは何でも御存知ですが、なせ人間は一つの口と二つの耳とを持つて居るのか、教へていただけませんか」とたづねました。

おしやべり家は思ひがけぬ問なので、「ぼかん」としてだまつて、しばらく考へて居りました。するとお尋ねした人が、

「それでは私がおなたにお教へいたしませう。それは人は澤山いろ／＼の事を双方の耳からか

き入れてから、わづか一つの口で必要な事だけ話すためなんですよ。」と申しました。

三、金時計はお母様に

或所に感心な子息がありました。お父さんには早くわかれましたが、お母さんは貧乏で、他家の洗濯物や仕立物をして、生計を立てて居りました。苦しい中から學校だけは通はして貰ひました。學校では先生のいはれることをよく守り、よく覺えて忘れない、家へかへつてはしつかり復習をして一生懸命です。お母様に口返しをしたことなどはありません、何時でもハイ／＼と腰軽くお手傳もいたします。それでゐて學校の成績は何時も優等で一番でした。小學校、中學校、高等學校、大學とだん／＼上の學校まで勉強していよ／＼卒業といふことになりました。

「お母様今度の卒業式には來て下さいね！ 私

がこうして卒業さしていただけるのもお母様のおかげですもの」とたのみました。

お母様はよそのお母様のやうに着かへて行くよ
い着物もありませんけれど、可愛い息子のいふこ
とですから出かけました。

息子はよろこんで、お母様の手をとつて美しい
着物や洋服などを着て居る人たちの間に座らせ、
自分は卒業生の席につきました。

やがて式が始まり順番が来て、息子が卒業演説
をはじめました。それは、實に立派なものでし
た。そして一番は賞品の金時計を授けられました。

観て居た人は皆感心してこのやうな息子を持つた
親は幸福だとうらやみ手をうつてほめました。

息子は式がすんでから大いそぎでお母様の所に
まわり

「お母さん、これはあなたのものです、あなた
のおかげで、もらへたのです！」

といつて金時計をわたしました。

この光景を見て居つた多くの人たちは、このお
母様のうれし涙と息子の笑顔とをながく、忘れ
ることが出来ませんでした。





喜びの保育

和歌山幼稚園長 中村 楠雄

幼い子達の相手をしてゐると餘りに美しい方面ばかりを考へてゐすぎた爲めに、案外な事に出會つてホントニ悲哀を感じる事もあります。私もかつて師範の訓導をしてゐた事がありますが、教生などは時々そんな風な事に就て實習録で若々しいけれども貴い悶を訴へる事がありました。

しかしそれらは皆々子供ばかりの罪とは言へません。子供はヤツバリ可愛いものです。よい事をして呉れた時は勿論ですけれども例ひおいたをしましてもヤハリ子供でなければ見られない美しさ

に、叱りどころか可愛いさで胸がいつぱいになる事があります。

でも子供には随分いろんなのがあつてどうしよう、どうしよう、本當にどうすればよいのか知らず、全く困つてしまふ様な事があります。そしてこれが解決に數日を要する事もあります。否一ヶ月も要する事があります。否々半年もかゝる事があります。それは子供の質と先生の腕前や熱心の程度にもよりますが、とうとう成功した時、あゝ其の時の嬉しさ喜ばしさは眞實たとふるに物が

ありません。其の胸中のスガスガしさ、これこそ光風霽月の状態と申してよいのでせうか、本當にお金では買ふ事の出来ない私其のみの味ひ得る喜びではありますまいか。

◇

房子さんと恵美ちゃん姉妹です。けれども二人とも未だずつとお小さいので赤組の子どもでもあります。所がこの子達に氣の毒な事には受持の先生が御病氣でおやめになつて、そして次の先生がいらつしやるまでに一寸間のあつた事です。其の間私は都合のつく限りこの組へ参りました。房子さんも恵美ちゃんもそれはそれはよくなつて呉れました。

ある雨天の日の歸るさでした。順ちゃんも文平さんも順ちゃん壽美ちゃんも……皆んな

「先生マント着せて頂戴」
と言ひます。それで私は一生懸命に着せにかゝり

ました。附添の人々も手傳つて下さいました。所が房子さんと恵美ちゃんは女中さんが来てゐるのに小さい脇にマントをしつかりと抱へてチットモ着やうとはしません。とう／＼一番おしまひになりました。私はそのそばへ行きますと

「先生に着せて頂くのだと申しチットモ着ませんのです。」

と女中さんが申します。それで私は

「それでは先生が着せてあげませう」

と言ひますとニコツと笑つて元氣よくマントを差出しました。そして着せ終るともう一つペンニコツと笑つて

「先生さようなら」

をして歸つて行きました。

次の先生が来て下さる日が参りました。今度の先生も大變おやさしくて本當によい先生でした。それですから子供達はすぐに馴れてよくなつきま

した。私も安心致しました。その中に夏休みが来て又夏休みが過ぎてしまひました。そして皆んな揃ひましたが房子さんと恵美ちゃんのお顔が見えませんか。どうした事かと思つてゐますと、房子さんと恵美ちゃんのお家はすつと遠い所なので今しばらく休ませるからといつてお届けが來ました。それから一ヶ月近くたつて二人とも元氣で幼稚園へ歸つて來ました。

所が二ヶ月程も幼稚園を放れてゐました爲か、どうしてもお席でお辨當を食へません。受持の先生も色々とお骨を折つて下さつたが仲々まだ思ふ様になりません。けれども女中さんと小使室であつたら食へます。或日受持の先生から御相談がありましたので、私も力添へ申上げる事にしました。そして受持の先生には一層工夫をこらして頂く事にお願ひいたしました。其の明くる日小使室で食べてゐる所へ行つて、

「お席へ行つて御飯食へない」と申しますと

「イヤイヤ」をします。

「小使さんの所で食べるとおいしいの」

と申しますとニコツと笑つてうなづきました。

「それじゃ此處でお稽古してをいてお上手になつたらお席へ行きませうね。」

房子さんも恵美ちゃんも得心したららしい様子で確かにうなづいて呉れました。

一方受持の先生には一層熱心に苦心して下さつて、食へないでもよいからお席へ這入りませうとか、先生と一つしよに後で食へませうとか、ポツリポツリと引き込んで行つて下さつたのです。とう／＼或日のこと一番後でなら食へると言ひ出したのです。

サア其の時の先生のお心持はどんなであつたらうかと思ひます。苦心をしたゞけに嬉しくて／＼

優しい女心からにはきつと涙の幾滴かをこぼされた事と思ひます。この涙こそ黄金にも玉にも換へ難い貴いものではありませんまいか。

そして房子さんも惠美ちやんも先生のお側を放れないで今では喜んで御飯をいただきます。

◇

愛子さんは縁組です。そしてお姉さんのリエ子さんと二人同じ組です。時には争ひをする事もありますが、毎日休まずに仲よく連れだつて参ります。リエちやんはさすがお姉さんだけあつて妹が無理を言つたり泣いたりする様な時には、よくお姉さんらしくお世話をなさいます。

所が愛子さんは妹であるしお家でも皆さんが可愛がりなさるので、どうかするとよく泣きます。そして泣き出すと仲々止まりません。こんな時にお姉ちやんは困つてしまひます。いや／＼お姉ちやんだけではありません。愛子さんが泣き出したら

受持の先生も全く困つてしまひました。

けれども受持の先生も氣長く何とかして愛子さんのこのクセを直したいものだと思ひながら努力を續けられてゐます。

或日のお辨當の時間でした。受持の先生が私に

「先生愛子さんはまた泣き出して止まりませんの」

と云ふお話しです。

「それじや一度二人で言つて見ませう」

と云ふので、受持の先生と私と二人で愛子さんの所へ行きました。すると愛子さんは未だお辨當に手もつけずお机の下に仰向けになつて、お隣の机をケリ飛ばしながら泣いてゐます。

愛子さんは時にこんな事を致しますけれど本當に純な子供です。其のダダケてゐる姿を見ても心から可愛いと思ひました。

「愛子さん、サア起きませう。起きて機嫌を直してね」

と私はやさしく言つて見ました。そこへ受持の先生が、

「愛ちゃん、ソール園長先生もあんなにおつしやつてのませう。早く起きてお眼々をふきませう。」と申されました。すると何と思つたのかスツツと泣きやんでお眼々をふきながら起きて來ました。

そこでまた私が、

「愛子さん、あなたは先生の申すことをよく聞いて下さるのね。お辨當も頂きますか」

と言ひますと、かすかにうなづきます。そして受持の先生がお茶をついで、

「愛ちゃん、先生が居つてあげますからサアお上り」

と申しますと、愛子さんはお箸を握つてチョボリとお辨當につけました。

其時！ 受持の先生と私とが思はず顔を見合せました。受持の先生の眼には強き歡喜の光がありました。

愛子さんは此の日はこうして救はれました。でも愛子さんの長泣きをする習慣を全くとるのにはまだ一／＼一寸には參りますまい。けれども熱心にして忍耐がよく、またやさしい愛情の持主である先生を得てゐる事は此上もない幸ひです。愛子さんの全く救はれる日の一日も早く來らん事をおいのり致し度いと存じます。

◇

慶造さんのお父さんはお醫者さんです。慶造さんは其の二男です。體も仲々しつかりして元氣なよい子供であります。しかしこんなに元氣な子供にするまでに四月からどんなに骨が折れた事でしょう。受持の先生の氣長い丹誠が全く慶造さんの今日あらしめたのであります。

慶造さんは今年始めて幼稚園へ來たと云ふのはありません。けれども病氣をして割合に長く休んでゐたために四月からこちらへの慶造さんの様子は全く具合がわるいのです。おうちのどなたかついてゐなければ承知をしません。お祖母さんも置いて歸へらうと數回試みられましたけどどうしても駄目です。

中々こればかりではありません。ちつともお席へ這入りません。何時もお部屋の入口の靴脱の上に女中さんと二人でうづくまつてゐます。従つてお稽古は何も致しません。又めつたに口をききません。お友達とも遊びません。こうした間に受持の先生は何とかしてこの子を救ひたいものだ色々手段が構せられたのであります。或時私へ「先生から一つペン申して見て下さいませんか」と云ふ事です。

それで私も行つて其の靴脱の所へ一つしよにう

づくまつて、

「慶造さん、サアお席へ這入りませう。皆んなおんなに面白くお稽古してゐますよ」とか「慶造さんは元氣ですね。ソレ私がお目々をつぶつてゐる間に這入りますよ」

などとやつて見てもぶんとしてゐて何の手應へもありません。

こりやいけぬ、今度はどうしようと考えて其の次の時には繪本を持つて行きます。そして

「慶造さん、自分ら繪本を見ませうか。これ何してゐるのですか」

と言つても見むきもしません。

それから後に行つた時には他の子達は折紙をしてゐます。慶造さんはやつぱり靴脱にしやがんでゐます。

「慶造さん。ソレこんな奇麗な紙！ これで何折りませうね。さあ一つしよに折りませう」

と言つて紙を與へて見てもチラツと見たゞけで手に取らうとも致しません。

でも毎日どうにかこうにか幼稚園へ参ります。それに仲々私達の思ふ様に参りません。身體検査の時でも決して受けやうと致しません。何となだめすかしても駄目です。はては女中さんにむしやぶりつくやら擲ぐるやら、とつてもしまつに終へません。

これは手強い。何とか名案がないか知らと思ひましたがそんなに取り早い方法も考へられませんが、結局慶造さんと私達とは離れて居すぎたのだ、だから慶造さんとお友達になるやうにもつともつと骨を折らうと思ひ定めました。

それから自由遊びの時を見はからつては出来るだけ繰り合はして出て行つて、何か知ら慶造さんに話しかけたり、お遊びの仲間に入つて貰ふ様につとめました。其の間受持ちの先生の努力、そ

れはもう云ふまでもありません。さうしてゐる中に何だか慶造さんも私達に親しみをもち出したのではないかと知らと感づかれぬでもない様になりました。けれどもまだくお席に入りません。勿論お遊びも致しません。

所が或る日ふと見ると慶造さんは女中さんと廻旋塔のそばにたつてゐるのを見ました。私はつかつかと其の方へ行つてすと乗りました。さあ子供達は喜んで

「先生ここへ乗つて頂戴」

「先生あたしの所へ来て頂戴」

「先生僕の所ですよ」

などと口々にやかましく騒ぎたてます。其の中誰か、

「先生僕押してあげます」

と叫ぶと、そこからもこゝからも、

「あたしもよ」

「僕もだよ」

と言つて押手も澤山出来ました。そこで私は

「サア南海の急行電車のように走つて貰ひませう」

と言つてひよつと慶造さんの方へ眼をつけて

「慶造さんも押してくれませんか」

と言つて見ました。するとこれはどうです。ニコ

ツと笑つたと見ると、いきなり私の座席の後をつ

かみました。私は

「しめたツ」

と心の中に叫びました。そして子供達が廻はして

くれてゐる間も心が落ちつかぬ位、胸がわくわく

する様な喜びを感じました。

それから私は下りて、

「慶造さん乗らない」

と申しますと、だまつて上つて座り込みました。

それで今度は私は慶造さんの座席の後を持つてぐるぐる廻はりました。

熱心にして注意深い受持の先生はこんな様子も

ちやんと見て居られた様です。そして私達は慶造

さんの段々よくなつて來る事を話し合つて喜びま

した。其時私は受持の先生に、

「慶造さんの爲めには少し荒いと思はれる様なお

遊びがよいのでありませんでせうか」

と申しましたが、同先生もやはりそんなにお考へ

の様でした。それから後は私も注意は致しました

が、受持の先生には益々熱を加へられよく忍耐さ

れましたので、子供は段々よくなつて行くば

かりでした。そして時々

「先生今日は慶造さんは走りを致しました」

「慶造さんは今日はお席の中へ這入りましたよ」

「慶造さんも折紙を致しましたの」

「やつとお遊戯室へ這入るやうになりました」

「もう大丈夫！ 今日皆んなとお遊戯をしまし
た」

と云ふ様な嬉しい／＼報告をして下さいました。そして夏休みが来る頃にはもう他の子達とほとんど變らぬ位になりました。殊に十月に運動會をした頃には、走りもすればお角力も取ると云ふ風に全く元氣なよい子供になつてゐました。今では家庭の方でも大喜びです。運動會をした時などにも前日に慶造さんのお宅から電話で

「明日は家内中見せて貰つて参ります」と申してお出でになつたり、又當日は早朝から見

にいらつしやつたと云ふ程の御熱心さであります。

けれどもこうした間に半年はたちました。随分私達の苦心も長き日を要しました。だが私達の働きは決して無駄ではありませんでした。子供の様子を見るにつけ、家庭の喜びを見るにつけ、私達も嬉しくて／＼何かしら感謝の念が切りに湧いて参ります。(大正十四、十一、九)

愛は最大の力なり



幼稚園のお母様はかやうに

水島 さゆり

春の牧場にソツト涌く泉のやう。

二

幼稚園のお母様の胸は、
若草のもえ出る牧場に、

ソツト涌く泉のやう。

幼ない子供等が

その胸にじつと耳をあて、

美妙な泉の歌をきいて、

おもしろいよ、愉快だよ、

ポコボン、ポコポコボンと歌つてるよ。

幼稚園のお母様の胸は、

幼稚園のお母様のお顔は、

眞夏の朝

バツト開いた朝顔のやう。

生々として、

さはやかで、

目が覺めるやう。

子供等の美しい清らかな瞳にうつる

幼稚園のお母様のお顔は、

眞夏の朝、

パツと開いた朝顔のやう。

三

ドンダリの小人に相撲をとらせようね。

葉つ葉のダンスといつしよにやらうよ。

自然を愛する子供等、

味のない木の實も、

風に舞ふ枯葉も、

可愛い、友達、

面白い仲間。

子供等と自然を愛し、

子供等と自然を楽しみ、

子供等の自然に

無限の感謝を捧げる者は誰——。

子供等と同じく

自然に愛せらるゝ

幼稚園のお母様——。

四

雪のどつさりつもつた晩に、

コツソリと煙突からはいつて来る

サンタクロースのおぢいさん。

おもちやの一ぱいにはいつた袋から、

人形や太鼓やお手玉を、

眠つてゐる子供等の枕べへ、

にこ〜顔でソツとおいていく。

あのサンタクロースのおぢいさんは、

誰だらう、どこの人だらう——。

きつとあれは幼稚園のお母様よ、

幼稚園のお母様が

サンタクロースのおぢいさんになつて、

コツソリと来るのよ。

大阪市露天幼稚園

松川ヨネ

三二

1、起 源

大正十年の夏大阪市視學鈴木治太郎氏が大阪市南區下寺町三丁目の八十軒長家を巡視されました時大いにこの地方に於ける教育の必要を痛切に感せられましたここに露天保育を試みる事になつたのであります(自大正十年十一月十五日)

2、市が特に露天保育を試みたる其理由

- (1) 建物はなくとも教育は出来るものであると云ふ其信念で
- (2) 否むしろ教育は自然に歸らなければならぬと云ふ其考で
- (3) 人さへあれば(幼児と保姆)教育はどこでも出来るものであると云ふ其理由で

3、目的—自然を友とすること

- (1) 健全なる心身の發育を計ること

4、方針

- (2) 情意的訓練をなすこと
- (3) 敬神感謝の念を養ふこと

5、主義—生活尊重主義

6、方法

- (1) 晴天の日はいつも戸外に出でて親しく自然の恩恵に浴しながら自由に楽しく愉快に遊ぶこと
 (2) 雨天の日はいづれも集會所内で遊ぶこと

7、用具

- 戶外用
 運動具
 網 籐輪 豆囊 フットボール 赤白旗 ラケット 毬 襴
 手綱 奴胤 紙風船 竹トンボ ゴム毬 羽子板とハネ 飛
 行機
 玩具 繪本 飯事道具 砂遊び用具
 其他 救急藥 糸 針 小刀 鋏 草履 製作材料一切
- 室内用
 恩物
 玩具

8、時間

自四月 自午前八時 自七月 自午前八時 自十月 自午前九時
 至六月 至午後二時 至九月 至正午 至三月 至午後二時

9、組の編制

- (八十名)
 年少組
 四の組(男女) 15名 主任保母 松川 ヨネ
 組の編制
 年少組
 一の組(男) 25名 受持保母 宇野 益實
 二の組(女) 20名 同 伊藤 マサエ
 三の組(男女) 20名 同 安井 トミエ
 何分戸外へ幼児を連れ
 出ることなれば保母の
 擔任幼兒數は約二十名
 程と市の方から定めら
 れて居ます。

10、經費—年額約二百圓

木炭代約五十圓

人夫賃約六十圓（使丁と云ふものがないから時々人夫を使ふこと）
とがあります

（市より）

備品費消耗費約九十圓

備考

(1) 保育料は徴收して居りません

(2) 保母の給料は市より支出もられます

1、集 合

保母も幼児も共に毎朝集會所に參ります（大阪市天王區下寺町三丁目五十二番地）

2、朝 會

大體全幼兒が出揃ひましたならば會集を致しまして其日の目的なり偶發事項を話したり、或は幼兒の要求を聞き入れたり等致します。

3、出發準備

人員點呼 履物服裝並に携帶品の檢査 整列整容 用便 乳母車の用意（保育用具一切載積） 水筒 救急薬の用意

(1) 此處は全く人里遠く離れたやうな感じのする誠に閑靜なしかも高燥な地でありまして、大樹は所々に繁茂して木々の芽ぐむ頃からは地は一面に緑と化して到る所に雜草が生々茂つて氣持ちよく、殊に暑い夏の日等は大樹の下で涼しく暮すことが出来ます。

（遊び場所）

（愛 染 堂）

(2) そして遊び場所も大變廣うございますから最も好都合であ

4、出 發

(晴天の日)

内 四天王寺境

りまして幼児等は春から夏、夏から秋にかけては専ら摘草に没頭して居ます。そしてそれで飯事遊びや花屋事等をしたり或は砂遊び等をしてゐます。

(3) 又冬になりますと此處で奴凧を上げたり追ひ羽根をついたりなどしく盛に遊びます。

(1) 幸ひ四天王寺境内の一隅には最も幼児に適した滑り臺やブランコ、圓木、砂遊び場等が設備されてゐますから此處へ出掛けて參ります時にはいつもかうした運動具で遊びます。

(2) それからここには鳩や龜がたくさん飼はれてゐますから鳩に米やお豆をやつたり龜に麩を與へたり等して遊びます。

(1) ここには動物園もあれば植物園もあり、又は市民博物館等がありまして幼児の見聞界を廣めることが出来ます。

(2) 又時々市民博物館内で教育的活動寫眞を見せていたゞくこともあります。

天王寺公園

(1) 其日の都合で全體が同一行動をとつて遊戯具や其他必要な保育用具を一切乳母車に積んで出掛けることもありますし、又組本位に別々な方面へそれゞ必要な玩具や用具を手には持ちながら出掛けることもあります。

5、備考

(2) そして時候のよい時には時折り其の遊び場所でお辨當を食べさせること
もありますが、然しこれは訓育上大いに考慮せなければならぬ点がある
と思ひますから特別の時の他は大抵集會所に歸つて食事を致すことにして
居ます。

(3) そして雨天の日や酷暑嚴寒の日等は集會所内で遊戯唱歌やお話をしたり
其他恩物や色々の玩具等で遊ばせてゐます。

(1) 日光浴や空氣浴を充分に致すことが出來ます。

(2) 草花に親み胡蝶や蜻蛉を友として遊ぶことが出來ます。

(3) 小石や砂で充分遊ぶことが出來ます。

(4) 敬神感謝の念を養ふことが出來ます。

(1) 廣々とした自由の天地で愉快に面白く楽しく充分活動することが
出來ます。

(2) 伸びくとした、しかも充實したる生活をなすことが出來ます。

(3) 自然身體も丈夫になり殊に健脚になります。

(1) 自然界や社會を充分觀察することが出來ます。

(2) そして現實に對する實觀的興味を養ふことも出來ます。

(1) 遊びに必要な器具は幼兒自らが運びます。

長所

1、自然の恩
恵に浴する
ことが深い

2、存分に活
動すること
が出来る

3、見聞を廣
める機會が
多い

4、情意的訓練を主とする
ことが出来る

備考 其上經費が至極僅かであり、誠に經濟的であります。

1、設備上から見て

- (2) 保育に必要な設備其他一切準備は幼児と保姆とで致します。
- (3) お掃除の如きも幼児と保姆とで致します。
- (4) 自然協同の精神や相互的觀念や自治的訓練を興ふことが出来ません。
- (5) のみならず幼児等は非常に忍耐し奮勵し努力して一生懸命に勞働を致します。
- (6) 各兒の行動實行經驗活動等により美しい感情を養ふことが出来ません。
- (1) 幼兒の遊び場所には必らず便所と手洗ひ場と休憩所とがなければなりません。
- (2) 然しかうして日々方々へ遊びに出掛けます時にはさうした設備を何處の場所にでも自由に得るといふことは中々不可能な事でありません。
- (3) だから此點につきまして保育者は一方ならぬ苦心と困難とを感じてゐます。
- (1) 戸外で食事をさせると云ふことは得て放逸に不作法になり易くある

短所

2、訓育上から見て

ります。

(2) だから特別の場合の外はいつでも集會所へ歸つてから致すことにして居ます。

3、都市の上から見て

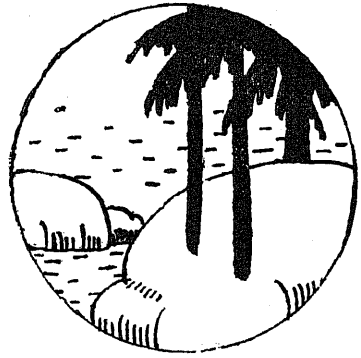
配な事でありませう。

(1) 毎日幼兒を引率して交通頻繁なる市中を歩くと云ふことは中々心配な事でありませう。
(2) 然し之も亦一つの訓練になるかも知れません。

備考

以上體驗から色々の事柄を考へさせられたり、或は又教へられたりなど致しまして之に對する意見なり希望なども湧いて參りますが、然し私共はモット／＼深く眞に研究させていたゞきませう。

自然は大なる學校なり



育 兒 叢 談 (六)

冬 と 子 供

大正十四年十月から十一月にかけて官報誌上に内務省衛生局
が載せてあつたものを茲に轉載する。

子供が丈夫であるかどうかとゆうことは、冬に
なると一番よくわかるものである。丈夫な子供
は寒空にも元氣よく跳ね廻るが弱い子供は寒さ
にまけて、部屋のかなかに少さくなつてゐる、親
達は丈夫な子供をますます丈夫になるように、
弱い子供はいたわつて育てなければならぬ。
それで冬の間の子供を鍛練し、また保育に必要
なことを本欄で數回にわたつて述べよう。

◆冷たい乾いた空氣の影響は冬は空氣が乾き、

氣温がさがり、寒い風が吹きすさむので、その冷
めたい空氣のために、かわい子供は皮膚は、か
わき切つてざら／＼になり、アカギレやヒビが切
れて、手足などは冷えて氷のようになる。呼吸器
の粘膜は、冷たい空氣の刺戟でカタルを起しやす
い。丈夫な子供は元氣と運動で自然に體中に熱が
でき、身體が暖くなるが、弱い子供はこの機能が
充分でないから、身體が冷えて火が無くては寒く
てたまらない。これは冬の空氣がかわき切つて冷

えているためである。

◆日本室は風邪を引きやすい。わが國の家の造りは、一體風通しがよくて、夏には洋館よりも涼しいが、そのかわりに冬になると、外の寒氣を充分に防ぐことがむづかしい。戸障子や天井板のすき間から寒い風が吹き込み、また障子紙を通して自由に室内の暖さがにげゆくから、室内は暖りにくく、かつすき間風のためにいつも室内に氣流があつて、一定の溫度を保つことが、よほどむづかしい。だから抵抗力の弱い子供は風邪を引く。

◆暖室装置は衛生上缺點が多い。理想的な暖室装置は完全なるストーブ、蒸氣、湯、電氣等で部屋を暖めるのであるが、これは今日わが國の經濟上の關係などから、まだ一般に行わたれそうもないことで、今のところ炭火を用いない譯には行かない。ところが炭火やガスは、燃ゆる時に一種の毒ガスを出すから、もと／＼衛生上甚だ害がある

から、この缺點を除くようにしなければならない（これについては後に詳しく報道する）

◆冬は子供の身體の機能が盛になる。秋から冬にかけて、子供の身體は夏とちがて、一般に機能が非常に盛になつて、胃腸は消化が強くなり食欲が進み、消化のわるいものを食べても、また少し位食べ過ぎても、割合に胃腸をこわさない。筋肉も引きしまつて、夏のように疲れ易くはなく、腦のはたらきも良くなつて、勉強も充分にできる、この機會において活動力の増進、身體の鍛練を心がけなければならない。

◆冬に強い子供はどんな子か。冬に強い子供はきびしい寒さにも一向おかまいなしで活動する子である、こうゆう子供は實に行末たのもしい子供で風邪などは容易に引かず、たとえ引いてもすぐなおる。こんな子供には、ヒビが切れるから手袋をはめなさい、冷たいから足袋をはきなさい、外に

出ずに家で火にあたれ、などと小さな慈愛よりもその子の將來のために、かえつて寒い思いをさせ氣まゝに外をはね廻らすがよい。これが親の大きな愛である。

◆弱い子供はどんな子か 弱い子供は寒くなると氣力がおとろい、部屋にいてふるえながら火鉢にかちりついて、外に出るのをいやがる。こんな子は、多少身體に特徴があるもので、多くは皮膚や粘膜の弱い子や、性來體質異常の子供である。簡単に説明すると、

——皮膚の榮養の悪い、過敏な子：皮膚に光澤がなく、脂肪氣に乏しくざらざらして、色も蒼白くその上過敏であるから、少し寒い風に當ると顔色が急に蒼ざめ、毛孔がたち、唇が紫色にかわりふる／＼ふるえだす。これと反對に寒い戸外から暖い部屋に入ると、顔色が急に紅くなり、手足がほとつて、しきりに汗ばむ。これ等は皮膚の榮養

の悪いのと、過敏な證據で、したがつて風邪を引き易い。

——扁桃腺を腫し咽喉を痛める子：餘り寒くもない初冬で氣候のかわりめなどにもちきに扁桃腺を腫らし、咽喉を痛め、熱を出したり、咳をしたりする。こんな子供の扁桃腺は大抵だんからはれあがつているもので、即ち淋巴性體質とゆうものである。さうゆう體質の子は夏の間からいつも心がけて丈夫にする工夫をして場合によつては、醫師の診察の上ではれあがつた扁桃腺を除去するとよい。

——呼吸器粘膜の弱い子：冷たい風に當るとちきにクシヤミをし、また鼻風邪をひいて、鼻汁をたらし、鼻聲をだす。また咽喉や氣管支の粘膜にちき炎症をおこして、咽頭カタルや氣管支カタルとなり、咳をしたり熱を出したりする、こん子は氣管支カタルが重くなり易く、肺炎をおこすお

それがある。また冬のうち度度病氣をくり返して容易になほらない。この種の子供は滲出性體質とゆつて、ふとり過ぎていたり、皮膚がたゞれ易かつたりおできができ易い體質のものに多い、そうゆう子はなるべく暖いところに轉地させ、また夏の間丈夫にする心がけなければならぬ。

二

鍛練と保護は子供を丈夫にする上には、一番大切のことでやり方を間違えると、丈夫な子供をかえつて弱くしたり、弱い子供は取り返しのつかないことになるから、子を持つ親たちはよく心得ておかなければならない。

◆冬の鍛練は筋肉、胃腸を主とする事 冬は一般に身體の機能が盛になるものであるが、その中にも筋肉と胃腸は、きわだつてその力を高めるから、冬に筋肉を鍛えて鐵のような剛健な身體を作りあげ、また丈夫な胃腸にすることを心がけなけ

ればならない。それには子供を務めて戸外の遊戯運動をすゝめて、筋肉を鍛え、またかたいもの、(いくらか消化のわるい物)などを食べさせ或は子供のほしがるまゝに食べさせて、胃腸の力を強くすることを計り、乳呑子には乳から普通食に移るなど、いろいろの試みを行う、その詳細は後に述べることにする。夏の間胃腸をこわし易い子供は、こようゆうやり方で、冬のうちに鍛えることが至極必要である。

◆皮膚や粘膜の鍛練は強い子供に限る 夏の鍛練は夏に行ふべきもので即ち冷水摩擦や深呼吸は、丈夫な子供に限つて行わせるべきものである。この鍛練法は夏から秋まで引續いてやつて来た場合には、冬でもやつてよいがこの際は特別の注意が必要である。なせならば、冬の氣候は皮膚や粘膜に對する刺戟がひどいので、とかく風邪をひきおこすものであつて、その危険な點は夏の間

に胃腸を鍛練すると同様である。

◆呼吸器を常に保護すること―冬は乾いた冷たい空気が、炭火から出る有害ガスは、いつも弱い子供の呼吸器粘膜を刺戟して害をおよぼすものである。小児科醫の取扱う冬の病氣の十中八九は呼吸器病であるのを見てもわかる。それだから常に消極的に呼吸器の保護を忘れてはならない。その上呼吸器の病氣はすぐに重くなるから、その手當もできるだけ早く手落ちなく、しないといけない

◆年齢、體質、強弱によつて加減―子供は年が少ければ少いほど抵抗の力が少い、かよわいものであるから、小さい子ほど一層氣をつけなければならぬ。乳兒などは鍛練の意味で寒いところにつれて行つたり、薄着をさせてはよくない。初生兒を保溫の充分でないため凍えさせた例はいくらもある。また生後半年前後の子供の風邪も甚だ危険である。四、五歳頃からは多少の手加減を加え

るのもよいが、眞に身體鍛練は十歳前後から始めるようにする。

子供には生れながらにして、いろ／＼の病氣にかゝり易い素質（病的要素）をもつてゐるものがある。例えば淋巴性素質とゆつて淋巴腺の大きいもの、またぢきに淋巴腺をはらすもの、或は滲出性素質とゆつて皮膚や粘膜の弱いものなどがある。その他病的素質はなくともある一つの機關、例えば胃腸とか、呼吸器とか、腎臓とかゝ弱い子供がある。こんな子供はその生れつき弱いところをよく考へて、鍛練と保護を加減しなければならぬ。運動をしてかえつて弱くなつたとか、冷水摩擦で肺炎にかゝつたりしたのは、つまり間違つた鍛練法の結果で、その罪は冷水摩擦や運動に歸すべきものでない。體質の關係は醫師に相談するがよい。その他身體の程度を考へて、鍛練と保護を加減しなければならぬことは明なことである。

▼乳児の保育

◆用心Ⅱ保護を専一にして無理をしないこと、乳児の抵抗力は極めて弱いから、すぐ風邪をひくその風邪は甚だ危険であるから、平生から用心に用心を加え、決して無理はしていけない。鍛練はこの時期には禁物である。

◆保温に注意Ⅱ乳児は體温を發生する働きが充分でないため、ちぎに冷えるおそれがある。小さければ小さいほどこの危険が多いから、注意しないと後悔するようなことになる。

……初生児（生れたての子供）は、第一に身體を温にし、綿でくるむのがよい、頭は深く真綿で包み、湯タンポで常に身體を温めるようにする。火鉢には赤く燃ひ切つた炭火を用いて、有毒ガスの發生を少くし、常に湯を沸し蒸氣を立て、空氣の乾燥を防ぎ部屋は疊の隙間からの風を防ぐた

めに、敷物を敷くか毛布の上に床を延べる。障子や襖のもる風を防ぐためには、屏風を立てるとよい。部屋の温度は大人が火に當らないで氣持のよい位がよく、大抵六十五度から七十度位までが適當である。

◆暖めすぎないことⅡ湯タンポや懷爐のために寢床の中が意外に暖まることあるから、時時手を入れて床の中の温度を調べることを忘れてはならない。乳児が汗をかくときは、常に温度を調節しておく。湯タンポから湯が漏れて赤児の足に火傷をさせることは、しばしば見受けるから注意が必要である。

◆外出は危険Ⅱ乳児を外出させるには餘程の注意を要する。三四箇月までの乳児は冬の間には絶対に外出させてはならない。わづかな氣温の變化でもちぎに鼻邪をひき、鼻をつまらせ哺乳ができなくなり、危険は毛細氣管支カタルや肺炎の原

困となるからである。宮参りなどには乳児は連れて行かないのがよい、少し成長して一年前後になつたら、風のない暖かい日、南向きの日常りで開けはなした空気の串で遊ばせることがよい。

◆着物の被せかたⅡやわらかい暖かいものを被せることはゆうまでもないが、身體を強く締めないように、また抱いたり、脊負ふ場合は特に注意したい。七八箇月から一年になり、子供が盛に手足を動かして運動を欲し、また這つたりあるいたりするやうになれば部屋を暖めて、できるだけ着物の被せ方を少くして、身輕に自由な運動が出来るやうにしてやる。これ等の注意は子供の身體の發育を助けるのに最も必要である。

◆食物の注意Ⅱ夏と違つて牛乳その他の食物は腐敗變質をする危険が少く、また胃腸も丈夫であるから、夏ほど食物について心配する必要はない乳児が七箇月になつて、乳以外の物をほしがるよ

うになつたら、乳以外の物を與えて離乳の準備をしてさしつかいが無い。また夏の間の離乳を見合せたものは、冬のうちに離乳を斷行するとよい。七八箇月の子供ならば、味附重湯・輕燒類・やわらかいパン類（ボール・ウエーフア類）などがよい。味附重湯とはいろ／＼の野菜類（大根・馬鈴薯・人参・菜）と肉または鰹節を用いてスープにして、これと米とで重湯をこしらいたもので、乳児はこれを喜んで食べる。やゝ長じた者には半熟卵・豆腐・小魚類・消化し易い固形物を與えるがよい。



兼ちゃん。

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(九) 豚の鳴き聲

「おら、大鳥のかみさんとこの夜の會なんか氣に留めてやしないよ。」と吉藏は、煙草の火を點けるのに新聞がみを細く折りながら言った。

「そんな事言つて、お前さん行くんだらう。」とお芳は勸め顔に言った。

「おめい行きたいのか。」

「それアお前さん、私や始終外へ出てゐるひとぢやないから……」

「全くだ。ぢや行くとしよう。おめいが朝から晩まで家の中に居るツてことをおら時々忘れるんだ。それにお前は、この半月といふもの千代坊で随分苦勞したからな。是非行くとしよう。」

お芳は嬉しがつた。

「今朝ね、大鳥のおかみさんが、青い花瓶と、黄色い鸚鵡のついた海老茶の椅子被ひと、そのほか二品三品借りに來たときに、あの人ツてば「あんたは旦那さんと仲がよくてな



んて言つて、それから斯ういふのさ……

「フン！ 大鳥のかみさんはくだらねい事いふな。」と吉藏が遮ると、

「くだらないお饒舌家だつて偶には眞實の事をいふよ。」とお芳は言つてから、これや、ちつと甘たるい事を言ひ過ぎたかと思つて急に世帯じみて、

「お前さんにシャツの良いのを拵へておいた。今日出来上つたばかり。」

「お、晴衣を着るツてわけか。」

「そうだよ。」

「立てカラぢやあるめい？。」

「そうだとも。上等のが着けるばかりになつてる。お前さんは立てカラを着けると氣が利いて見えるよ。アイロンをかけながらも、私を思つてたの。こんなに丁寧にしてあるのがお前さんに氣が付くか……」

「おめいは、おれをいつでも自分の思ふ通りにさせるな。大鳥の宅へ、千代坊の赤ネルの衣服で行けつておめいに言はれると、おらそうしねいちやならねい氣がするせ。」

「まさか！」とお芳は勝ち誇つた女のする笑ひ方をして「そろ／＼支度をした方がいゝね。」

「だけど、子供達は如何するんだ。」



「兼坊は連れて行くの。大鳥のおかみさんが連れてらつしやいって言ふから。あの子を置いてゆくのは困るツて私が話したもんだから。」

「そいつは豪儀だ」と吉藏まで大満足で、「あいつは會が好きだから。」

「どうか面目ないような事をしてくれなければいゝが。」

「あいつは良い子だせ。千代坊はどうするんだ。」

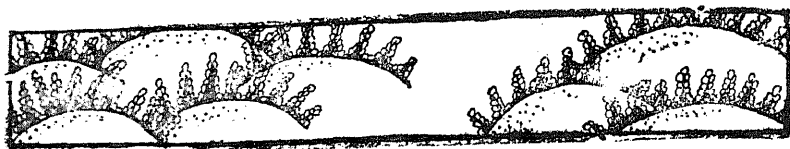
「坊やはぢき寐てしまふから、私達が戻つて来るまで濱野のおかみさんに居てもらふ事にしてある。」

「何もかも道具立てが出来てるのか。」と好人物らしく吉藏は答へて、「もしおらが行かないつて言つたらおめいどうする氣だつた。」

「だつてお前さんが行くの分つてるもの。……お前さん階下へいつて兼公を呼んで来て下さいな。大方初ちやんと遊んでるんだらう。」

x x x x x x

夜になつて親子三人大鳥の宅へ出かけて行つた。大鳥のおかみさんといふのはお芳がよく噂をする通りに「可愛さうに、家にたいした道具がないくせに、それア、お客をするのが好きな人」だつた。この人は、自分の持つてゐない裝飾品を借りまはる事が平氣だから

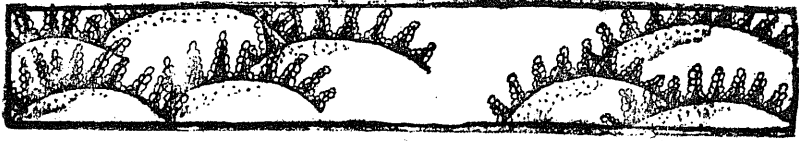


會の時にはその客間はでこ／＼に飾り付けられてゐる。たゞ自分の夫には始末に困るのだ。大鳥のおやぢはバン屋なのだが、お客をする晩には宵の口から臺所のベッドに退却してしまつて、そこで大躰をかくことといつたら客間に居る人達にはつきり聞こえる程だつた。おかみさんはいろ／＼工夫をして、一度などは、洗濯物挟みでおやぢの鼻をつまんで置いて見たが、一向効力が無かつた。おやぢは、はじめは大人しく洗濯物挟みではさまれてゐたがやがて、うなされたやうになつて、半分寐ぼけて誰だかおれの呼吸を止めようとするツて、壁をドシ／＼叩いて氣味わるい聲ではめき立てるのたつた。

こんな事があつてからは、躰をかくまくにさせてあつた。そして、おかみさんは譯を知らない御客に、一々説明することにしてゐた。

吉藏とお芳とが來るとすぐ、大鳥のおかみは話してきかせた。二人は一番遅れて來た客だつた。先着の六人は客間の壁に沿ふて席を取つて談話をすこししたり飾り付けを長く眺めたりしてゐた。窓際に居た小柄の女などは、飾り物が多いのとその色のあでやかなのですつかりすつみこんでしまつたらしかつた。

兼ちゃんは膝蒲團を懸掛代りにあてがはれて、母親の足許にゐたが、「母ちゃん、あそこの青い花瓶はうちのによく似てゐるね。」



「黙つておいで……奥さん今のお話では……」

「母ちゃん、黄色い鸚鵡のゐる椅子被ひがあそこに……」

「兼ちゃん、黙つて！」と母親は恐い顔をして見せた。

「怜悯な子ですね。」と大鳥のおかみは感心した。この人は、こんな事をいはれても別に氣を悪くしなかつた。客間に光彩を添へてゐる物品のうちで、お客達が銘々の所有品だけを認る分にはかまはないと思つてゐた。

「あつちへ行つてお父ちゃんの傍においで。」とお芳は言つて吉藏に「お前さんこの子を見てゐて下さいよ。」と頼んだ。

兼公は膝蒲團を二人のお客の足向ふへ投つておいて父親の傍に蹲まつた。大人達……しかも多數が中年者……の中なのでこの子は何だか工合がわるかつた。それに父親が窮屈さうにむつがしい顔をしてゐるのが氣になつた。

退屈な三十分が經つて、いよ／＼この子は黙つて居られなくなつた。

「お父ちゃん。」と彼は言ひ出した。吉藏は堀井のおかみさんが自分の夫の兀頭の話を長々とやつてゐるのを神妙に聽いてゐた。「お父ちゃん。あの音なに。」

「ありや、なんでもないよ。」と父親は大鳥のおやちの駄だと氣付いたので



「たゞ 音さ。」と答へた。

「大きな豚みたいだね、お父ちゃん。」

「シ！ 今、何か言つちやいけない。」

「あたゐ 大きな豚が……」

「このお子は何をいつてるの。」と堀井のおかみさんが優しい笑顔をしたので、兼公はすぐさま友達になつたような氣になつて

「豚だよ。」と親密らしく説明して「そら、聞こえるだらう。」

堀井のおかみさんは笑つて兼公の頭を撫でた。「いゝ子だからね。今そんな豚なんていふのお止し、さ、お菓子を一つ進げませう。」

兼公はお菓子を口へ入れ、膝蒲團をこゝろもち堀井のおかみさんの方へ寄せて「小母ちゃん、ありがとう。」と嗔れ聲でいつた。斯うやつて二人は長い事件よくしてゐたから、吉藏もすいぶん助かつた氣がした。

九時半ごろにお客は座れるかぎり楕圓形のテーブルに就いて、女主人が取り分けてくれる軽いお馳走をたべた。兼公は、母親の目くばせを見ぬふりをし、肝油といふいやな薬が世の中にある事も忘れて、饅頭をしたゝか食べた上に、ラムネを二瓶とあけてしまつた。



お馳走が終つて椅子がもとの通り壁際へ戻されると兼公は、

「おもしろい會だね。お父ちゃん。もうおうちへ歸るの。」

吉藏がそれに答へないうちに、主人役が、これから石川さんに獨唱を願ふからと口上を述べた。誰もくが、隅に居る中年の大柄の男の方を見た。その男はしきりに額を拭いてそはくしてゐた。

「さあ、さあ、石川さん。」と大鳥のおかみさんは勢をつけるやうに「何でも御氣に入りの歌を一つ。御心配ありませんよ。こゝに居る方はその方面の方でないから。」

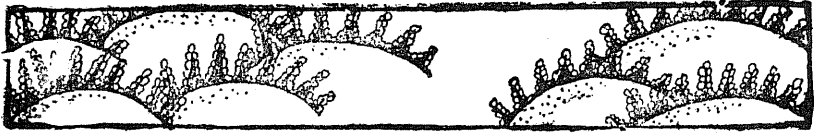
「さあ、おやりなさい、石川さん。」と數名拍手しながら勧めた。

「あの人 喜劇の人？」と兼公が尋ねた。

「黙つて！」あぶないと見てお芳は子供を制しながら、自分の傍に座つてゐる夫をも肱で押した。

石川さんは、一インチ程椅子をすり出して眼を天井に据えて、ド、ミ、ソ、ド、ソ、ミドと小聲に鼻でやつた。

誰だかくすく笑つた。吉藏は兼坊の口を手で、きつくなく併し斷乎として押へて居た。「今調子を合せてゐるツてなわけですよ。」と石川の妻君がいつた。この人こそこの宅の



客間の装飾品に居すくめられてしまつた人だつた。

「宅は調子が中々見付からない人ですが、その中にちやんとしますよ。」

かういふ間にも、石川さんはド、ミ、ソド、ソ、ミを相かはらずやつてゐるので、兼公は可笑しがつてく／＼蒲團の上で身を揺りながら、それでも餘儀なく黙つてゐた。

やつと、石川さんは小唄を一つはじめたが第一節を半分ほど唱ふと、もすこし低い調子に下げなければならなくなつた。

「いつもあれなんですよ。」と妻君が辯解して「ちやんと調子が出ると相應によく唱ふんです……もつとも言句を忘れさへしなればね……あなた調子がとれましたか。」

「今、うまくいきさうだつたのに、お前がいけなくしてしまつた。その内うまくいくだらう。」と石川さんは決然として答へた。なるほど調子が取れて一曲きかせてくれたが、その聲はこんな大きな男にしては、びつくりする程ちいさかつた。

兼ちやんには欺されたような氣がして、腹を立てないまでも、とにかく非常に詰らなく思つた。その内に眠氣がさして來たので父親に抱かれてすやく／＼と眠つてしまつた。幾人かのお客がかはる／＼唱つた……もつとも石川さんの／＼やうに骨の折れたのではないが……その間中この子は寐てゐた。



お芳と吉藏は、今夜は兼坊がおとなしくて幸だと悦んでゐた。堀井のおかみさんと今一人の婦人客は、こんなよい男兒を持つてお仕合せだと賞めてくれたりした。その途端に兼公は目を覺して眼をこすりく／＼あたりを眺めた。

「可哀さうに、この子は眠くてたまらないんですよ。」と堀井の妻君がいふ。

「ほんとにね。くたびれたの坊や、」と今一人が相づちを打つ。

「こんなにお行儀のいゝ子はめつたにありませんよ。」と大鳥のおかみがいつた。

石川の細君は何ともいはないで苦笑してゐた。この子が石川さんの事を喜劇俳優だといつたのがまだ癢に觸つてゐたのだらう。

「もうおうちにかへりませう、兼ちゃん。」とお芳がいつた。

兼公は今までの自分についての批評を耳に入れてないで、寐ぼけ眼で何かに聴き入つてゐたが、

「やア、きこえる。きこえる。」とつぶやいた。

「まだ半分眠つてるンですよ。」と大鳥のおかみさんが

「何がきこえるの エ。」堀井のおかみさんが、

兼ちゃんはまだ眼をこすつて、



「きこえる……家の中に居らア！ お家ン中だ！ 大きな豚見に連れてつてよ、お父ちゃん。」

暫時は誰も黙つてゐたが、みんな笑ひ出してしまつた。氣の毒な！ 大鳥のおかみさんも顔を赤らめながら仕方なく一所に笑つたが、あくる日堀井の妻君がよその人に話した通り、全く當惑したらしかつた。

お芳は、あわてゝ訛言をいつて暇乞をし、夫をせき立てゝそこを出た。そして自分の家へ着くまで一言も口をきかなかつた。千代坊を見てゐてくれた濱野のかみさんが歸つてしまふとお芳は三分通り眠つてゐる兼公を無造作に床に入れ、それから椅子に仆れるやうに腰を下して、夫をつく／＼と見てゐた。

「さて」、としまひに彼女は言ひ出した。

「さて、どうした。」と吉藏は機嫌よくしようとして「夜の會へ行つて來たな。」

「もう懲り懲りくだ！」

「何だつてさ！」

「だつておまいさん。私や今までだつて面目ない思をした事はあるが、今夜のような目に遇つた事はない。兼公……」



「あいつに罪はありやしねい。大鳥のおやぢの事をいつて聞かせて置けばよかつたんだ。お前さんは、兼公の肩をもつて、……どうせ私なんかどうでもいゝんだから。」

「何いつてるんだ!。」

吉藏は起ち上つて妻の傍へ行つて、「おめいもかわいゝ困つた奴さ。」

「そんなおべんちやらにのるもんか。」

吉藏は何も言はずにさまざまお機嫌とりの方法を講して結局うまく成功した。お芳はふとい歎息をついて、夫を見て微笑した。

「だけど、あの子をどうしやうね。」

「どうもしようがねいや。」

急に二人は笑ひ出してしまつた。





幼児教育の根本原理 (三)

静 枝 譯

東テキサス州師範大學の練習學校長ピツケット、同大學幼稚園長アユラルアイ、ホーレン著幼児教育の第一章を譯したのである。吾々幼稚園關係者小學校初學年教師の參考となること甚だ多いと思はれるが特に本誌に掲載する。

すべての子供は話す事を好み、何か話の材料を持つてゐて適當な刺激の下にそれを話す。子供は抜けた齒や新しい靴だのに就いても話したがらる。併し多くの學校に於て、子供は此の爲に如何なる好機會を持つてゐるであらうか。子供自身の貢獻といふ事を考へ入れず、子供にとつて興味のない、子供の經驗とはかけ離れた事柄について言葉や讀方を教へてゐる教師が多くないか。然かも直ぐ手近には、始終豊富なる材料が、それを明かにすべく一寸した質問を待つてゐるのである。是等を取入れることによつて活動的な小さい子供達は無味乾燥なる教課を生氣の充ちた者に代へる事が出来るのである。

入學前の年頃の子供はよく自分の見た物を作る。丸太に釘を打つたり、眞直にそれを抜いて見たり、小さい斧で家具を壊したりする。併し子供はある隠れたる力によつて、之れを餘儀なくさせられるので

ある。此の物を要する欲望は學校生活について來る。それで實地經驗ある教師は此の子供の構成本能に叶ふ如き材料を供給する。斯くして家庭生活と學校生活とは整理をすべき何等の混亂なしに、子供が新教育に慣れて行く様によく調和させられる。

有らゆる子供は長上の着物を著る事を喜ぶ。子供は其れを着た時に、大人の特権のあるものが、自分に著いて來る様に感ずるのである。お母さんやお父さん遊びは慥に子供の氣に入りの遊びである。又此の子供達は種々の自然の材料で自分の身體を裝飾する。學校は此の子供の裝飾愛を考に入れて、若し子供達が、何か餘所行きごっこでも仕様としたならば子供に簡單な物でよいから、何か子供が着物を造りたいと思つてる材料を與へるがよい。子供は太鼓を打つて行進する時には兵隊さんの帽子を冠つて旗を持つ事を欲する。此の欲望を満足させる方法を講ずる事は容易な事である。

好奇心は子供が學校に持ち來る最も大なる要素の一である。子供は自分で想像する物や解らない事はすべて穿鑿しやうとする。或る朝幼稚園で一人の女の子が皆に何か與へる間皆眼を閉じてゐる様に、子供達に手で目を抑へさせてゐた。所が、一人の小さい男の子はもう我慢し切れ無くなつて「もう待つてられない、待つてられない」と叫び出した。又ある子供は日曜學校で天井の扇風機を見て「どうして廻るの？」と尋ねた。電氣によるのだと告げられたら直ぐに問うた「それは何處にあるの？」

好奇心は研究に對する強き誘因となるものでこれを刺激する所の好機會は幾らもある。校庭や運動場

を散歩する時にも、鳥の巢や、蟻や蜂の働を見る爲に森の中で過ごす半時間中にも得られるのである。

學齡前に於て遊びの世界は子供の世界である。我々の文明に位置を占める爲にせねばならぬ經驗を、すべて教へられる事は兒童にとつて可能の事である。十六年から二十年で原始生活と今日の文明生活との間に橋渡しをして今日の文明状態に達せねばならぬ。これを爲すには自然の命ずる道、即遊戯をせねばならぬ。遊戯は自然を映す鏡である。遊戯によつて兒童は人間生活の有らゆる須要な關係を覺える。然らば遊戯とは何であるか。心を籠めて爲す事である。若し大人が、心を籠めて仕事をするならば彼は仕事に對して遊戯的態度である。彼はそれを仕遂げた結果の誇の爲にそれをする。同様に、周圍の大人の生活を模倣して遊んで居る子供は、假ひ大人の眼にはたゞ遊んでる様に見え様とも、眞實は働いて居るのである。遊びの生活が、自然生活である以上は、學校は課業を始める基礎として、先遊びの生活と與へねばならぬ。此の爲に、多數の幼稚園及小學校の初學年に於ては自由時間又は自由なる朝が與へられてゐる。此の時間の子供の動作は、社會的習慣を教へ、後になつては道具を使用する學課を教へる出發點を與へる。子供が遊んで居る時、同情ある觀察者は、兒童教育の如何なる書物にも未だ見えない教について多くの事を發見するであらう。

我々は積木をし泥のパイや御殿を作る事によつて、我々の眼の前で形を作つてゆく製作者を見、又歌を歌ふことに於て生れながらの詩人を見、又人物や植物と遊んで生長して行く養育者を見、又模倣穿鑿

●蒐集分類の遊びを發達させる科學者、又多くのゲームの勝負に従事する戰士を見るであらう。とマクミランはその著書に述べてゐる。

幼稚園活動の原理の討究は此の種の兒童の自發教育に於ては猶歩を進めて教師の位置にも及ばねばならぬ。教師が強制抑壓を爲す事無く自由・獨立・自己表現を主張する所の學校に於て教師は如何なる位置を占めたらよいか。フレーベル氏の幼稚園に於ては教師は中心人物であつて、丁度周圍に小さい幾つもの遊星を還らしたる太陽の如きものであつた。モンテツソリの學校に於ては傍觀者であつた。しかし新しき幼稚園に於ては幼兒を保護世話し、又その幼兒の忠告者指導者、友達として教師を認めてゐる。教師は幼兒かも知れず椅子に腰掛けてゐないで子供達と一緒に居る。教師は精神的に幼兒の近くにあると共に又身體的にも近くあらねばならぬ。ミラー氏は教師が教育法に取り入る可き唯一の新らしい要素は導いてやる事であると云つてゐる。先生は子供が知らねばならぬ事を教室で皆教へるより、子供が自分でこれを悟る様に仕向けて行かなくてはならぬ。或る朝二人の女の兒がボールを蹴つて居た。彼等は各百度それを蹴る事に定め、それを黒板に記録した。其の中一人の子供は自分には之が出来るか如何か疑はしくなつて「先生助けて下さい」と先生の方に向いて言つた。他の場合には先生は仲裁者たらねばならぬ。或る幼稚園で子供が、皆綺麗な新しい汽車で遊ぶ事を欲した。其の中でも殊に四人の子供が、自分の要求を通さうと言ひ張つて先生の所へ走つて行つた。先生は順々にそれで遊ぶ様に告げた所

が、子供達は猶聞かなかつたので、先生は遂に「大人しく順番を待つ事が、出来なければそれを取り上げて仕舞ふ」と言つた。此の目前の災難で子供達は喧嘩を止めた。子供は時々遊んでる時に他人の権利と衝突する。人は生れ乍らにして強き個人的傾向を有するものである。斯うした時先生は御仲間を犠牲にして自分の我儘を通さうとしてはならない事を子供に悟らせる様に導く。併し他人の事を構はない様に強ひるだけでは充分でない。他を助ける事に喜びを見出す様に導かれねばならぬ。人は助なくしては眞の獨立は無いといふ事を幼年時代に於て悟らせねばならぬ。

四歳から八歳までの子供の教育は、連続せる過程であるから幼稚園と小學校初學年の教師は、同一の訓練をなす事が望ましい。さうすれば子供は急に小學校へ飛び移つたといふ移動の感を起さずに幼稚園から小學校に行ける。子供は幼稚園でも小學校でも同じ材料で同じ状態で仕事をし又遊ぶ。一年生の教室は丁度今離れた幼稚園の室の如くである。其處には元の友達があり玩具があり人形がある遊び道具がなくして淋しいやうな事は事にもない。幼稚園と同じ長き卓と椅子もある。併し第一學年に於ては子供が道具仕事の要求を感じそして直接の努力がそれを用ひる様に習慣づけさせる爲に幼稚園に於けるよりもつと多くの物がある。幼稚園と小學校初學年との相互關係は此の方面の指導者の努力によつて今日完成せられてゐる。我々は凡ての子供が幼稚園に入り、急に飛び移る事なくして著々と過程を進んで行く時の近からん事を望むものである。眞に小學校教育が著々と漸進的進歩をなし、其のよつて立つ基礎は幼稚

園であることを明確にせねばならぬ。

皇后陛下東京女子高等師範學校に行啓あらせらる

大正十四年十一月廿九日、東京女子高等師範學校開校五十年記念式が午前十時より大講堂に於て舉げられた。この日

皇后陛下には同校に行啓あらせられ特に、令旨を賜はつた。

式後 皇后陛下には陳列室を御巡覽遊ばされ、特に幼稚園陳列室に於ては、陛下御在園當時の保育室遊戯室の古き寫真によつて當時を御慕遊ばされ、幻燈室にては五十年の變遷を語る映畫を御覽遊ばされ、

御機嫌麗はしく正午過ぎ全校職員生徒來賓一同の奉送裡に御還啓遊ばされた。尙ほ五十年記念式その他の模様は次號に於て詳細報告する豫定である。

告 稟

一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歓迎いたします。

一、寄稿は一行二十六字詰に記して下さい。但改行は一字下げること。また句讀點は一字あけること。

一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び奇贈の新刊等、交換雜誌、入會手續、更に

本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内 日本幼稚園協會

一、本誌購讀御希望の方は日本幼稚園協會に御加入下さい居所、氏名を明記し會費前金にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會に御申込下さい。

一、日本幼稚園協會會員外にて本誌御注文の方は「前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合には總て一割増)

一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、本誌の代金を對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

定 價

一ヶ月分一册	金參拾五錢	送料貳錢
半ヶ年分六册	金貳圓拾錢	送料共
一ヶ年拾貳册	金四圓貳拾錢	送料共

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)

大正十四年十二月十日 印刷
大正十四年十二月十五日發行

幼兒の教育 第二十五卷 第九號

不 許 複 製
禁 轉 載

編輯兼 堀 七 藏
發行所 東京府豊多摩郡戸塚町大字戸塚五七五

印刷者 大杉直次郎

印刷所 大杉印刷所
東京市牛込區山吹町一九八

發行所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

振替口座東京一七二六六番

告 廣

特等面一頁 金參拾圓 二等面一頁 金貳拾圓
一等面一頁 金貳拾五圓 一頁以下御斷
神田區南甲賀町八品田奥松に御申込下さい

謹告

一、機關雜誌**幼兒の教育**は發行者を本會主幹堀七藏發行所を日本幼稚園協會に變更し、前發行者敎文書院越元新吉とは一切の關係を斷ちました。従つて幼兒の教育に關する一切の御通信は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會宛に御願ひ致します。

二、日本幼稚園協會譯**幼稚園保育要目**の版權は日本幼稚園協會が譲受けましたから御注文の方は當協會宛に御申込下さい。定價金壹圓五拾錢前金(郵税不要)にて振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に御拂込み下さらば直に御送附いたします。尙大正十二年十二月以降の幼兒の教育、多少殘本が日本幼稚園協會にありますから入用の方は至急御申込下さい。

大正十四年 月

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

文學博士
久保良英主幹
青木誠四郎主任

幼児の研究 第一輯

低學年、幼稚園の教育は教育の根柢であります。ですから歐米のこの方面の研究、施設の發達には極めておどろくべきものがあります。本書はそれ等を知ると共に、我學界の尊き研究の發表機關です。幼い小供のよき教育のために、本書の必讀を切に推奨致します。

目 概 容 内

幼児に於ける數の發達について
 兒童精神の理解について
 兒童生活理解の方法及書方に關する研究
 幼兒の實驗的研究の歴史
 廣島高等師範學校文學博士
 東北帝國大學文學士
 文部省立女子師範學校
 西アキサス師範學校
 アイオワ大學バード・ポールドウイン

京城帝國大學教授
福富一郎新刊
先生新著

メンタル・テストの原理

テストの結果標準を知らんとする人の爲めに提供す

入學試験問題としてメンタルテスト或はテスト形式の適用は、科學的正確といふことに對する人間の根柢深い要求によつて今や當然のことと考へられて來た。本書は我が國に於ける教育心理學の權威福富先生が久しき以前よりこれが理論及び實際についてなせる眞摯なる研究の成果で最も親切丁寧にして且つ基本的科學的なる解決を提供し得る近來の好著である。

巨理章三郎新刊
先生主幹刊

個性と教育

凡ての根本基調は徹底した個性の研究殊に教育上の個性の研究と公にした。最近ニューヨークに於てその實際を實驗研究せられたる結果であつて幼い子供の教育にあつては教師保姆諸氏へすすむ。

文學士
青木誠四郎譯

保育學校實際研究

全一冊 三拾六錢
 定價 四拾八錢
 送料 拾八錢

文學士
青木誠四郎著

兒童心理學序說

全一冊 四拾錢
 定價 四拾錢
 送料 拾八錢

東京女高師前講師
黒瀨豐子著

幼兒の想像と其教育

全一冊 七拾錢
 定價 七拾錢
 送料 拾八錢

文學士
上野陽一著

學校精神検査法指針

全一冊 七拾錢
 定價 七拾錢
 送料 拾八錢

醫學博士
三田谷啓著

兒童保健

全一冊 七拾錢
 定價 七拾錢
 送料 拾八錢

發行所 東京市牛込區中區文館書店 電話 振替 東京 三三三番 三三三番 二二二番 七五番

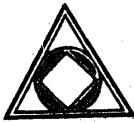
幼児の最良運動具を提供します

此の運動具は理論家技術家實際家の最善
を盡したる研究の結晶であります

1925年式

鐵製運動具

鐵製アランコ	¥ 65.00
" 辻 臺	¥ 90.00
" 遊 動 木	¥ 95.00
" 迴轉シーソー	¥ 70.00
" 迴轉馬椅子	¥ 45.00
" 迴轉スケート	¥ 38.00



町谷ヶ指区川石小京東
館ルベール 会社株式

一〇三六川石小話電
〇四六九一京東替振